

ブをとられることを不満に思っていたので、2番目の成績のブラウンに「君の番が来た。大英帝国のメンツにかけて首席になってくれよ」と励ました。

○やがて菊池の病気は全快し、学期試験も終わって、発表された成績は、やはり菊池が1番でブラウンは2番であった。

○ブラウンは満足そうにこう眩いたという。「ああ僕はこれでイギリス人の誇りを傷付けなくて済んだ」と。実は、ブラウンは、入院中の菊池に毎日授業のノートを送り続けていたのだ。

**【授業者のコメント】** 人の不幸を願い、人の失敗を喜ぶ世に、何と奥ゆかしい姿勢だろうか。この誇りを大切にしたい。貴方も今日からできることを。

### 【学生の反応】

◎ 〈この回では、タイトルを見せずに本文のみを提示し、読み終わってから発問「このストーリーに相応しいタイトルは何か?」を問うた。〉

○ 菊池大麓のストーリーに付けたタイトル案……「真剣勝負」「揺るがぬ魂」「誇り高き人」「最高の2番目」「真の友情・ライバル」「英国のサムライ」等

○ 先に話の内容を示された後に、自分でタイトルを考えるのは、話の内容のポイント把握の訓練になっていい。こういう道徳授業があると良かった。

○ 今日の話のような「真の誇り」や「紳士的な態度」を徹底すれば、いじめなどは起きないと思う。これならいじめ指導に道徳が効果を上げられそうだ。

○ 大島さんの話や菊池さんの話は、生徒の立場で道徳の授業を受けているようで実践的だ。こういう道徳の授業も、こういう大学の授業も受けたことはない。

(3) 第5回授業……山野井泰史「登るだけで余計なことは考えない」

**【ストーリー概要】** ※希望・勇気 — TBS・TV「情熱大陸」(2006.6.11)より

○ソロクライマー、48歳。登山方法は8,000m級の世界で有名な山を、あえて単独・無酸素(1度も酸素ボンベ使用せず)で踏破。しかも、垂直壁面をよじ登

るクライミングにこだわり、世界の登山家たちが驚く難ルートを開拓。

- 11年前、突如暗転した。ヒマラヤの高峰ギャチュン・カン（7,952m）で雪崩に遭い、奇跡的に生還したが、凍傷で両手及び右足の指計10本を失った（同行していた妻も計18本の指を失う）。リハビリに4年、また登り始めた。
- 「物欲は全くないなあ。たまに都会の雑踏を歩いていると、オレの方が楽しんでいて幸せだろうな、と思うんです」「おれたち夫婦は、頭が真っ白になるまで登り続けますよ」二人はバイトをして1か月12万円くらいの清貧生活。

**【授業者のコメント】** 我が身の損傷をもともせず、ただひたすら難ルートの開拓を目指す生き方。ただ1つのことに没頭して生きる生き方もある。

### 【学生の反応】

- ◎この回も、タイトルを見せずに読み終わってから後にタイトル案を問うた。
- 「山野井泰史さんの話」のタイトル案……「人生楽しんだ者勝ち」「一心不乱」「不撓不屈」「前人未到」「自分の道を信じ抜く」「挑戦する幸せ」等
- あのストーリーは、伝える側には伝えたいものがあるだろうが、受け取る側は自由な発想でいろいろの意味を受け取れる可能性があるのが素晴らしい。
- いじめで自由に発言できない子にあの登山家の誇りと自信をもたせてやりたい。
- (4) 第6回授業……ウォーレス・カロザース「人生で一番大切なもの」

**【ストーリー概要】 ※積極的な生き方** —井本稔『ナイロンの発見』より

- 女の人と靴下は戦後強くなったといわれる。アメリカで世界初の化学繊維ナイロンを発明した天才科学者カロザースに、デュポン社は一生飲み食い住まいその他一切の費用の面倒をみる契約をし、彼一生の生活費や遊び代ぐらい幾らでも払おうとしていたが、彼は41歳で青酸カリ服毒自殺をした。
- 当然、貧しさが原因ではない。ではなぜ自殺したのだろうか。それは、いかに恵まれていても生きることにながなかったのだ。研究に行き詰まり、やりたいことがなくて、将来を悲観していた。夢や意欲を失っていたのだ。
- 生きる上で、お金や生活の余裕が十分保証されれば必ず幸福になるとは限ら

ない。一時期そうあったとしても。お金や贅沢な暮らしは、人生を幸福に暮らしていくためには2番目以下だろう。では人生で1番目に大切なのは？

【授業者のコメント】 物質主義と拝金主義が横行する今の世の中。真の幸福は、お金もたらすレベルの幸福だけだろうか。幸福の意味を考えてみよう。

### 【学生の反応】

- [ウォーレス・カロザースの話] のタイトル案……「愛」「夢」「生きる目的」「欲をもつこと」「生きている実感」「身近な希望」「周りの人の支え」「家族」「精神的な充足感」「目標」「生きがい」等
  - 話のタイトルを付けるのに、まちまちの意見で不協和音の感覚が心地いいが、これが道徳の面白さなのか。自分が受けた道徳には少しも感じなかった。
  - この話を前の登山家の話とリンクして考えさせると生徒により深く考えてもらえるのではないか。道徳の話は、連続性があるとより深く伝わる気がした。
- (5) 第13回授業……コナン・ドイル「真に人を信じるとは」

【ストーリー概要】 ※尊敬と信頼 —コナン・ドイル『五十年後』より

- ◎ 50年間、カナダに渡ったままのジョンをイギリスの港町で待ち続けたメアリー。ジョンは記憶喪失になって別の人生を生きた。果たして2人の結末は。
  - ジョンはカナダに渡った直後、悪人に大怪我を負わされ記憶喪失になった。ジョンの消息は何もなく、メアリーは母親と年金で細々と暮らしていた。
  - ジョンは記憶のないまま一生懸命に努力し成功した。退職後、港でイギリスから来た水夫の方言を聞き、やがてすべての記憶を甦らせることができた。
  - ジョンは帰国し、メアリーが盲目になっても待ち続けていることを知った。2人は結婚式を挙げ、郊外に美しい家を建て、それからは幸福に暮らした。
- 【授業者のコメント】 信じ抜ける相手を見つける眼力と強さを持ち、自らも信じ抜いてもらえる人間性を磨きたい。人を信じるとはどういうことか。

### 【学生の反応】

- 道徳授業がこういう風に生きることの参考になるのは、この年齢になったからだろう。中学生の時は何もわかっていなかったなと思う。

○人を信じて心を捧げることは大きなリスクだろう。信じ切って得られる幸福な時があるだろうが、その状態に辿り着く前に即効を求めてしまう。

○この話の文庫本を見つけた時は小躍りした。内容を読んで考えさせられたのは、自分の行動1つが人の人生を左右しかねないという重さだ。自分の行動は誰かの人生と確実に繋がっているということ。心して生きて行こうと思った。

## 6 番外編—「教職概論」の授業実践での「体験的・実感的ストーリー」

最後に、別の教職科目「教職概論」において、教師の一つの生き方として伝えている典型的な「体験的・実感的ストーリー」がある。それは、筆者が学級担任教師時代に用いた道徳授業資料としての端緒から、校長時代に朝礼講話として完成させた、筆者とある生徒との真実のストーリーで、筆者の教職経験における最も大切なストーリーである。

### 1【校長の朝礼時の講話・その1】 「本当の楽しさは我慢しないと味わえない」

今は便利な世の中で、聴きたい音楽、食べたい食べ物、話したい相手とすぐ話せることなど、何でも手軽に手に入る時代になった。しかし、本当に音楽も食べ物も相手との会話も満足できるものになっているだろうか。

#### — 〈配布資料〉「魂に力を蓄える」(全文) —

自分を抑える。我慢をする。すると、魂に力が蓄えられてくる。

映画が見たい。1本我慢する。2本我慢する。3本我慢する。4本目にこれだけは観ようと思う。観る。そりゃああんた観る力が違う。観たい映画全部観た人とは、集中力が違う。

自分を抑える訓練をしておくことは絶対に必要だ。そういう訓練をしなかった人は肝心なときにも自分を抑えることができない。これだけは言っただけならいなくても、しゃべってしまう。しゃべらないまでも、顔に出してしまう。そういう安っぽい人間になってしまう。(出典不明)

そう、少しだけ我慢してみるといい。我慢するということは、魂に力を蓄えること、力を貯めることになる。そういう経験をしてきた人は強い。音楽もいい音楽を聴くことができ、食べ物もおいしく味わえ、人との会話も大切なものに感じられるようになる。このことをよく覚えておいてほしい。

## 2【校長の朝礼時の講話・その2】 「T男を頑張らせたものとは」

今から20年以上も前に、中学校である男子生徒の担任になった。T男である。彼は、ちょっと乱暴で、キレやすく、悪さをする子で、3年になった最初の時もあまり勉強しないで、サッカーばかりやっている子だった。ところが、2学期からサッカーも我慢して受験勉強を頑張り始めた。そして3学期には、始めは無理だと思えるほど難しいレベルの公立高校に合格し、卒業していった。その頑張り始めるきっかけになったのは一体何だったのかと不思議に思っていたが、卒業後しばらくして、T男の母親が私を訪ねて来た。手にプリントを1枚持って。そのプリントはその半年前に私が学活の時間に配ったものだった。

その日、学校から帰ったT男が、そのプリントを母親に見せたという。「これ読んでみ」と。その後、プリントが卒業までの半年以上もT男の机のどこかに残っていたようだ。母親がこっそりそれを持って来てくれたのだ。私は嬉しかった。まさか、半年前に配ったプリントが大事にされていたとは。

そのプリントには、こう書かれていた。(上記資料「魂に力を蓄える」)T男は、このプリントを読んで、我慢してみようと思つたらしい。プリント1枚でも、人の考え方や行動をしっかりと変えられるんだと実感した話だ。

## 3【校長の朝礼時の講話・その3】 「T男との決裂と再会」

- 以前話したが、T男について、その後の大切なことを話してみよう。
- T男は、サッカーが好きで、キレやすく、大人や教師を信用せず、何かあるといつも逆らっていた。しかし、級友からは信頼され、男気の強い、約束を必ず守る男だった。卒業後、「小学校の時から中2まで、これまでどの先生に対しても、“センコー”と言って、誰にも“先生”と呼んだことがないT男が初めて中元先生のことを家で先生と呼んだのですよ」と母親が教えてくれた時は実に嬉しかった。彼は中学校を卒業し、公立高校に入学した。
- 中学校卒業後、T男は時々中学校の後輩のサッカー部に教えに来ていたが、卒業して2年目の頃、新しいサッカー部の顧問の新任教師がT男が来るのを嫌がった。当然、T男の中学校までの教師不信が再燃し、言い争いになるトラブルが起こり、とうとうある日來校した時にキレて暴れた。
- それはある日の放課後、職員会議を行っていた時、突然、少し離れた職員室の方から主事さんの叫び声が聞こえた。みんな一斉に職員室へ駆け付けてみると、信じられない光景であった。T男が、職員室の書類棚、食器棚、書物棚などガラスというガラスを棒と肘で次々と割っていた。とっさに私を始め、男性教員数人でT男を体ごと羽交い締めにした。私はT男の正面から相撲のように脇の下から背中に腕を回してT男の動きを止めようとした。他の先生たちもT男を必死に制止した。やがて、T男は身動きできなくなった。次の瞬間、T男は自分の口の真ん前にある私の肩を上着の上から噛み付いた。一瞬右肩に火が点いたような痛みが走ったが、少ししてサッと肩をひねって外し

た。その後ももみ合っていたが、やがて教頭先生の通報で制服警官2名が土足で入って来て、T男に手錠を掛けてあつという間に連行して行った。

- T男が暴れた理由は、サッカー部顧問教師との行き違いであった。その夜、T男と、教員5、6名は警察署の取り調べを受けた。夜7時半に始まった調書作りが終わってタクシーで帰宅すると翌朝3時であった。
- その警察署で、「中元先生はいますか」と一人の刑事に呼ばれた。「先生、肩を見せてください。OO先生から、中元先生がT男から肩を相当強く噛み付かれたと聞かされたものですから」と言う。そこで、別室で上着やシャツを脱ぐと驚いたことに、私の右肩は赤紫色に大きく腫れ上がっていた。刑事はすぐにボラロイドカメラで何枚かそれを写した。実はこれが後になって、T男は中元が肩のケガを刑事にチクった、と勘違いすることになったのである。
- T男は警察署の留置所に3日間拘留され、4日目の朝、釈放され帰宅した。その日は日曜日で、母親は電話で私に「すぐに来てほしい」と懇願してきた。すぐタクシーで駆け付けると、私を一切拒否する憎しみのこもった真っ赤な目でらみつ付けてきた。「もうおまえは信用しない」と吐き捨てるように言い、その後一切口をきかなかつた。帰り際、母親が申し訳なさそうに見送りに出て、いつかT男もわかると思います、と慰めてくれたが、言いようのない暗い気持ちで、放心したように帰宅した。
- それから3年ほど経った時、突然彼から職場に電話が入った。その学校に聞いて、私が教育委員会に転勤したことを知って電話をくれたのだ。私は驚いた。私鉄駅で待ち合わせ、お酒を飲んだ。彼は20歳になったばかりだった。カメラマンのアシスタントとして、張りのある表情をしていて安心させられた。そして、会ってすぐに、あの時、私が自分から進んで刑事に肩の噛み付かれた跡を見せたのではなく、OO先生からの情報で刑事が見せてほしいと頼んだと聞いたという。「先生、悪かったよ、あの頃オレは誰も信じられなくなっていたから」と頭を下げた。早く謝ろうと思ったが、なかなか決心が付かず今日までできてしまったと話す彼を見ながら、私は完全にヒロイズムに酔っていた。「男だなあ」と一人悦に入っていた。その日は明け方までお酒を飲んで、誰もいない夜明けの大通りを二人で話しながら歩いた。実に肩の荷が下りた感じであった。「先生、また飲もうよ」「あのなあ、男はそうバタバタ会うことはできないだよ」「出た！！先生いつも男らしくいたいんだよね」「そうだ、オレはカッコイイ男を見せないといけないからなあ」「オレも、男を上げてまた会いに来るからさあ、その時はまた会ってよ」「いいね。そういう日をめざして生きていくのはいいよなあ」その朝は少しも眠くなく、とにかく嬉しくて嬉しくて最高の気分であった。
- それ以来、彼には会っていないが、それでいいと思っている。私とT男はまさに劇的な時間を過ごした。これぞ教師冥利に尽きる経験であろう。

【学生諸君へ】 皆さんは、教職が居心地よく働けるか、に関心が強い。しかし、今日言いたいのは教職の面白さだ。努力さえ忘れなければ、この種のストーリーがたくさん経験できる。教師になってこの妙味を味わってほしい。

## 【学生の反応】

○先生と教え子の魂のぶつかり合いは凄まじいものだった。中学生という、社会への自立を考え始める年頃の生徒と劇的な出会いだと感服した。私もそのような素晴らしい経験を教師になりたいと強く決意した。日々頑張ろうと思う。

○これほどの経験をする教師は滅多にいないだろうし、そんな教師生活を体験してきた先生の授業を受けることができ、心から運がいいと感謝したい。

この体験的・実感的ストーリーは、「T男を頑張らせたものとは」と「T男との決裂と再会」の2話よりなる複合的な構成のストーリーで、「リアリティ→説得力」と「人の生き方への憧憬→モデル性」が大きい。教師は、自らの生き方を通して、このようなストーリーを紡ぎ上げていきたい。

## おわりに

「教科化」の動きは、これまで凝り固まっていた道徳教育の殻を打ち壊し、新たな次元に飛翔しようとするものである。「安全運転ばかりでなく冒険運転を」「場面発問からテーマ発問へ」「展開後段を柔軟に」「シチズンシップ教育の導入を」等々、道徳教育・授業は変わろうとしている。

道徳教育は、子どもたちを自律した大人に育てることをねらいとしている。しかし、まず教える教師自身が自律しているかどうかが問われる。教師が自律しなければ、道徳教育の停滞に終止符は打てない。そのためには、これからの教師は、道徳教育に関連する言説を一つ一つ自分自身で吟味し、自分自身の言葉で語る力を備える努力が欠かせない。

体験的・実感的ストーリーは、教育のロマンである。感傷的すぎるかもしれない。しかし、道徳教育の活性化という現実の教育課題の解決には、粘り強く取り組む行動力と、内側にその源泉としての情熱が欠かせない。

最後に、先に触れた吉田松陰が牢獄で他の囚人たちに聴かせたという『講孟割記（こうもうさっき）』からの警句を引用して結びとする。

山径の蹊間は、是を用ふればその路を成すことも倏忽の間なり。  
又用ひざれば茅草生じて是を塞ぐことも亦少頃の間なり。人の心も亦然り。  
忠孝節義は人性の好む所なれば、其の教耳に入りて心に通ず。甚だ倏忽なり。  
但私欲の萌生じ易き者故、暫く惰慢すれば、放心することも亦甚だ容易なり。  
然れども塞がる者は暫く塞がる。若し荆棘を掃い蒙茸を披けば又路を成す。  
放つ者は暫く放つのみ。若し猛省して収斂する時は、又心を存するなり。  
或ひは開、或ひは塞、或ひは放、或ひは存、一反手の如し。

**[池田貴将訳] 感動は逃げやすい**

山の小道というものは、人が通っているうちは道ですが、  
ひとたび人が通らなくなると、すぐに草が生え、ふさがってしまいます。  
人の心も同じで良い話は誰もが好きだから、  
すぐに影響されて「自分もがんばろう」と決意しますが、  
行動に移さないと、すぐに心から逃げてしまいます。  
道ができるか、ふさがるかは一瞬です。

**参考文献**

- 文部科学省『中学校学習指導要領解説・道徳編』日本文教出版、2008  
文部科学省『私たちの道徳 中学校』廣済堂あかつき、2014  
片上宗二『敗戦直後の公民教育構想』教育史料出版会、1984  
上田薫「道徳教育の理論（1960）」「社会科では道徳教育ができないか（1958）」「道徳による創造（1979）」「戦後道徳教育における改革と反改革（1977）」『著作集6 道徳教育論』所収、黎明書房、1993  
河野哲也『道徳を問いなおす一リベラリズムと教育のゆくえ』ちくま新書、2011  
林 泰成『道徳教育論』放送大学教育振興会、2009  
松下良平編著『道徳教育論』一藝社、2014  
吉田武男『「心の教育」からの脱却と道徳教育—「心」から「絆」へ、そして「魂」へ』学文社、2013  
押谷由夫・柳沢良太編著『道徳の時代をつくる！—道徳教科化への始動—』教育出



- 版, 2014
- 東京学芸大学道德教育研究会 配布資料『第5回道德授業パワーアップセミナー—教科化時代の道德授業とこれからの道德授業』(含: 永田繁雄作成資料), 2014
- 押谷由夫『「特別の教科 道德 (仮称)」に求められることと具体的取組』(第21回心を育てる教育研究会・講演資料), 2014
- 特集「「私たちの道德」教材の特質と活用のポイント」『初等教育資料』2014年7月号, 東洋館出版社
- 下村 晶「『教科化』時代にふさわしい道德教育の方法とは—『新しい道德教育』は何を意味するのか」『教職研修』2014年9月号所収, 教育開発研究所
- 西岡加名恵「パフォーマンス課題作りのチェックリスト」西岡加名恵・田中耕治編著『「活用する力」を育てる授業と評価・中学校』所収, 学事出版, 2009
- 胤森裕暢「これからの道德の授業は社会科とどう関連を図るのか?」『教育科学 社会科教育』2014年9月号所収, 明治図書出版
- 大杉昭英「新しい学習指導要領・新学習指導要領の批判的検討(3)道德教育」『季刊政策・経営研究』2009・vol.2 所収, 三菱UFJリサーチ & コンサルティング
- 小川仁志『「道德」を疑え!—自分の頭で考えるための哲学講義』NHK 出版, 2013
- 大島みち子『若きいのちの日記—「愛と死を見つめて」ミコのノート』学陽書房, 1996
- 高森顕徹『光に向かって100の花束』1万年堂出版, 2000
- 井本稔『ナイロンの発見』東京化学同人, 1971
- コナン・ドイル「五十年後」『百年文庫・絆』所収, ポプラ社, 2010
- 吉田松陰著 近藤啓吾全訳注『講孟劄記(下)』講談社文庫, 1980
- 池田貴将編訳『覚悟の磨き方 超訳 吉田松陰』サンクチュアリ出版, 2013

